

2025 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.15)

日時:2025年11月28日(金)10:00~14:00

場所:Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

“Urban Space, Guilds, and Governance: The Role of Wharves in Ottoman Istanbul in the 18th Century”

岩田和馬 (東京外国語大学大学院 総合国際学研究所)

報告内容

交易の中心地であり、帝国最大の消費都市であるイスタンブルには、商品取引や旅客のために設置された多数の船着場が設置されていた。これらの船着場の周りには多様な同業組合が店舗を集中させていたことは先行研究においても指摘されていたが、船着場そのものや、その周囲で活動する同業組合の実態については十分な分析が行われていない。

本報告では、18世紀イスタンブルの船着場とそれを利用する同業組合の関係に着目し、都市空間と社会経済集団の間に存在した相互規定性を分析した。18世紀イスタンブルの船着場は、統一的な管理主体を持たず、宮廷建築家長官、海軍工廠長官、ボスタンジュバシュなどがそれぞれの権能に応じて重層的に監督を行った。一方で商品取引の中心地である船着場は、同業組合にとって集団化の基軸としても機能し、一つの同業組合の中に地区ごとに形成されるサブグループを生じさせた。また、船着場もまたそれを利用する同業組合の利害に応じて新設され、時に分割された。報告では運送業者と商人の同業組合を取り上げ、それぞれの同業組合が営業する船着場とどのような関係を構築し、船着場周囲の地区をどのように規定したか、そして営業地の違いが集団内部にどのように利害の異なるサブグループを形成したかといった点を分析した。

ディスカッションの概要

本報告では、18世紀のモロッコとオスマン帝国の外交関係を専門とされるベイルート・アメリカン大学の Peter Kitlas 先生にコメンテーターを引き受けていただいた。コメントでは、本報告のミクロレベルの社会分析への評価をいただき、前近代都市社会史における空間分析研究や労働社会史研究など様々な分野への接続が可能であるという評価をいただくことができた。一方で、「住民」や「共同体」といった用語の定義の明確化やより広い文脈への位置付けをより明らかにする必要性をご指摘いただいた。また、オスマン帝国の中でも特殊な位置を占めるイスタンブルの事例がオスマン帝国の他都市においてどれほど敷衍可能かという点についても議論が必要であるというご指摘をいただいた。また、同じくベイルート・アメリカン大学の Dima de Clerck 先生からもベイルートとイ

スタンプルの比較可能性についてのご質問をいただくことができました。コメントと質問は現在執筆中の博士論文に可能な限り反映していきたい。

会議参加の感想

博士論文執筆中に本会議に参加し、海外の研究者からのコメントを得る機会を得られたのは貴重な体験であった。また、研究分野の異なる同世代の研究者の重厚な発表を聞き、見識を広げることができる点も本会議の魅力の一つである。

加えて、都市史研究を専攻する身としては、バイルートという特殊な社会と内戦の経験を持つ都市を訪れることができたのは望外の喜びであった。今回の会議参加で得られた経験を今後の研究活動に最大限活用していきたい。

情勢が逼迫する中で会議を開くためにご尽力頂いた黒木英充先生、後藤恵美先生、スタッフの皆様には心より御礼申し上げます。